

## 「少年の日の思い出」

組番

考えるレッスン 文脈から「少年」の心情の変化を捉えよう。

課題 次の感情は、それぞれ少年がどの場面で抱いたものだろう。

その箇所を本文から探して——線を引き、下の欄に順番に書きいれよう。

必死さ、満足感、恐れ、あきらめ、恥ずかしさ、勇気、絶望、期待、後悔、怒り、不安、悲しさ、欲望

エーミールがこの不思議なちようをもつてているということを聞くと、僕は、すっかり興奮してしまって、それが見られるときの来るのが待ちきれなくなつた。食後、外出ができるようになると、すぐ僕は、中庭を越えて、隣の家の四階へ上がっていった。そこに、例の先生の息子は、小さいながら自分だけの部屋をもつていた。それが、僕にはどのくらいうらやましかつたかわからない。途中で、僕は、だれにも会わなかつた。上にたどり着いて、部屋の戸をノックしたが、返事がなかつた。エーミールはいなかつたのだ。ドアのハンドルを回してみると、入り口は開いていることがわかつた。

せめて例のちようを見たいと、僕は中に入った。そしてすぐに、エーミールが収集をしまつてゐる二つの大きな箱を手に取つた。どちらの箱にも見つからなかつたが、やがて、そのちようはまだ展翅板に載つてゐるかもしれないと思いついた。はたしてそこにあつた。とび色のビロードの羽を細長い紙きれではり伸ばされて、クジャクヤママユは展翅板に留められていた。僕は、その上にかがんで、毛の生えた赤茶色の触角や、優雅で、果てしなく微妙な色をした羽の縁や、下羽の内側の縁にある細い羊毛のような毛などを、残らず間近から眺めた。あいにく、あの有名な斑点だけは見られなかつた。細長い紙きれの下になつていていたのだ。

胸をどきどきさせながら、僕は紙きれを取りのけたいという誘惑に負けて、留め針を抜いた。すると、四つの大きな不思議な斑点が、挿絵のよりはずつと美しく、ずっとすばらしく、僕を見つめた。それを見ると、この宝を手に入れたいという、逆らいがたい欲望を感じて、僕は、生まれて初めて盜みを犯した。僕は、ピンをそつと引つぱつた。ちようは、もう乾いていたので、形は崩れなかつた。僕は、それをてのひらに載せて、エーミールの部屋から持ち出した。そのとき、さしづめ僕は、大きな満足感のほか何も感じていなかつた。

ちようを右手に隠して、僕は階段を下りた。そのときだ。下の方からだれか僕の方に上がつてくるのが聞こえた。その瞬間に、僕の良心は目覚めた。僕は突然、自分は盜みをした、下劣なやつだということを悟つた。同時に、見つかりはしないか、という恐ろしい不安に襲われて、僕は、本能的に、獲物を隠していった手を上着のポケットに突つこんだ。ゆっくりと僕は歩き続けたが、大それた恥ずべきことをしたという、冷たい気持ちに震えていた。上がつてきた女中と、びくびくしながら違つてから、僕は胸をどきどきさせ、額に汗をかき、落ち着きを失い、自分自身におびえながら、家の入り口に立ち止まつた。

すぐさま僕は、このちようをもつてることできぬ、もつていてはならない、元に返して、できるなら、何事もなかつたようにしておかなければならぬ、と悟つた。そこで、人に出くわして見つかりはしないかということを極度に恐れながらも、急いで引き返し、階段を駆け上がり、一分の後には、またエーミールの部屋の中に立つていた。僕は、ポケットから手を出し、ちようを机の上に置いた。それをよく見ないうちに、僕はもう、どんな不幸が起つたかということを知つた。そして、泣かんばかりだつた。クジャクヤママユはつぶれてしまつたのだ。前羽が一つと触角が一本、なくなつていて、ちぎれた羽を用心深くポケットから引き出そうとすると、羽はばらばらになつていて、繕うことなんかもう思いもよらなかつた。

盗みをしたという気持ちより、自分がつぶしてしまった、美しい、珍しいちようを見ているほうが、僕の心を苦しめた。微妙などび色がかつた羽の粉が、自分の指にくつづいているのを見た。また、ばらばらになつた羽がそこに転がっているのを見た。それをすっかり元どおりにすることができたら、僕は、どんな持ち物でも楽しみでも、喜んで投げ出したろう。

悲しい気持ちで、僕は家に帰り、夕方まで、うちの小さい庭の中で腰かけていたが、ついに、一切を母に打ち明ける勇気を起こした。母は驚き悲しんだが、すでに、この告白が、どんな罰をしのぶことより、僕にとつてつらいことだったということを感じたらしかつた。

「おまえは、エーミールのところに行かなければなりません。」と、母はきっぱりと言つた。「そして、自分でそう言わなくてはなりません。それよりほかに、どうしようもありません。おまえのもつているもののうちから、どれかを埋め合わせにより抜いてもらうように、申し出るのです。そして、許してもらうように頼まなければなりません。」

あの模範少年でなくして、ほかの友達だつたら、すぐにそうする気になれただろう。彼が、僕の言うことをわかつてくれないし、おそらく全然信じようとしないだろうということを、僕は前もってはつきり感じていた。そのうちに夜になつてしまつたが、僕は出かける気になれなかつた。母は、僕が中庭にいるのを見つけて、

「今日のうちにでなければなりません。さあ、行きなさい。」  
と、小声で言つた。それで、僕は出かけていき、

「エーミールは？」

と尋ねた。彼は出てきて、すぐに、だれかがクジャクヤママユをだいなしにしてしまつた、悪いやつがやつたのか、あるいは猫がやつたのかわからない、と語つた。僕は、そのちようを見せてくれ、と頼んだ。二人は上に上がつていつた。彼はろうそくをつけた。僕は、だいなしになつたちようが展翅板の上に載つているのを見た。エーミールがそれを繕うために努力した跡が認められた。壊れた羽は丹念に広げられ、ぬれた吸い取り紙の上に置かれてあつた。しかし、それは直すよしもなかつた。触角もやはりなくなつていて。そこで、それは僕がやつたのだ、と言い、くわしく話し、説明しようと試みた。

すると、エーミールは、激したり、僕をどなりつけたりなどはしないで、低く「ちえつ。」と舌を鳴らし、しばらくじつと僕を見つめていたが、それから、

「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな。」  
と言つた。

僕は、彼に、僕のおもちやをみんなやる、と言つた。それでも、彼は冷淡に構え、依然僕をただ軽蔑的に見つめていたので、僕は、自分のちようの収集を全部やる、と言つた。しかし、彼は、

「結構だよ。僕は、君の集めたやつはもう知つていて。そのうえ、今日また、君がちようをどんなに取りあつかつてているか、ということを見ることができたさ。」  
と言つた。

その瞬間、僕は、すんでのところであいつののどぶえに飛びかかるところだつた。もうどうにもしようがなかつた。僕は悪漢だということに決まつてしまい、エーミールは、まるで世界のおきてを代表でもするかのように、冷然と、正義を盾に、あなどるように僕の前に立つていて。彼はののしりさえしなかつた。ただ僕を眺めて、軽蔑していた。

そのとき、初めて僕は、一度起きたことは、もう償いのできないものだということを悟つた。僕は立ち去つた。母が根掘り葉掘りきこうとしないで、僕にキスだけして、かまわずにおいてくれたことをうれしく思つた。僕は、「床にお入り。」と言われた。僕にとつてはもうおそい時刻だつた。だが、その前に、僕は、そつと食堂を行つて、大きなどび色の厚紙の箱を取つてき、それを寝台の上に載せ、やみの中で開いた。そして、ちようを一つ一つ取り出し、指で粉々に押しつぶしてしまつた。

